

〈1996年度大会関係論文 シンポジウムI 「日本の教育システムの問題点—大学教育が果たしている、果たしていない役割—」〉

生涯教育と家庭教育の視点からの大学教養教育の新展望

—シンポジウムIにおける発題—

土 橋 信 男

(北星学園大学)

〔キーワード：大学の教養教育，新しい教養教育，日本人の教養，国際人の教養，生涯教育，家庭教育〕

1 大学において必要な教養教育とは？

本シンポジウムの主題は，現代の日本の教育システムの問題点を探るものである。そして，それを大学教育において，それが果たしている役割と，果たしていない役割という視点から検討することを狙いとしている。

私に与えられた課題は，さらにその中において，生涯教育と家庭教育とに関わって，大学の教養教育が果たすべき役割と果たしていない役割について論ずることによって問題提起をすることである。

さて，与えられた課題に関して述べる前に，私自身の大学における一般教育または教養教育（以下教養教育と表現する）についての考えを述べてみたい。

私は，大学における教養教育とは，高等教育を受けた未来の市民（国民）がそのおかれた社会において，第一に，人間として人間らしく精神的に豊かに生きるためにそして自分が生活している社会をも豊かにするために，さらに望むらくは国際社会においても貢献できるようなそうした現代人として持っているべき教養を培うための教育であると考えている。

では，人間として人間らしく生きるために持っているべき教養とは一体いかなることなのであろうか。それは第二次世界大戦後においてようやく国際的に承認をされるようになった，すべての個人の人權が貴ばれるという人權尊重の概念がその核をなし，したがって人權が尊重される生き方のための教育であるといえよう。

即ち，人は誰でもその潜在的な能力を十分に発達させ他に従属することなく，主体的に自分の人生を豊かに生きることができるよう知的，情操的，そして意志的な力を身につけることが望ましいのであって，そのための教育は義務教育段階では勿論，高等学校の教育におい

てもなされねばならないであろうが，大学においても高等教育に相応しいより高度の内容でなされるべきであろう。

次に人は孤立して生きているのではなく，地域・国家そして国際社会の中で，他の人々との関わりの中で，また様々な組織・制度の恩恵によって生きているのであるから，その社会の理解をするとともに，その社会を他の人々とともにより豊かにしていく責任を負っているといえよう。そうであるならば，社会の理解をするだけでなく，その社会を豊かに創っていくことの出来る力も必要で，特に大学を卒業するという事はそうした社会形成力をもつことが期待されてしかるべきであり，大学における教養教育はそうした内容を十分に含むべきであろう。

われわれの社会は基本的には民族や国家によって成り立っている。すなわちそれぞれの国民性や文化を基底にして成立している。他方，現代の社会は，急速な国際化，情報化，そして高度科学技術化によって，国を越えた普遍性を付加しつつあり，共通の側面を持ちつつある。従って，われわれは自国の文化を理解し受け継ぎつつ，同時に普遍的な知識や技術あるいは文化を理解することによって初めて現代人としての知的，精神的そして情操的に豊かな生活を送ることができるといえよう。さらにその豊かな生活を自己のみで享受せず，隣人や地域とともに共有することが望ましい生き方であるといえよう。

そうしたことを考えた時，これまでの大学の教養教育としての一般教育が果たしてそうしたことを視点において構築されていたのだろうか。疑問に思わざるを得ない。

何故ならば，これまでの多くの一般教育の実態は，主として過去の学問構造としての人文科学，社会科学そして自然科学という分類によった三分野の領域の中で蓄積されてきた知見・知識の伝達を一方的に行っていたので

はなかったか。それ故に学生に高校までの授業と大差ない知識の切り売りだといって、通称「パンキョウ」といって軽視され、出席を取らなければ開店休業のような授業となっていたのではなかろうか。しかもそれをよしとして十年一日のごとく行ってきたのではなかろうか。

勿論、すべての一般教育の授業がそうであったわけではない。未来への教養のために工夫をこらし、熱のこもった授業が試みられていた事実もある。しかし、残念ながら、そうした授業は少なかったのではなかろうか。

2 大学における新しい教養教育の提案

さて、これまでの大学における教養教育のあり方を反省したが、ではどのような教養教育が望ましいのであろうかということについて論じてみたい。

既に述べたように、新しい教養教育とは、新しい時代が要求する教養を内容としなければならないであろう。また人間として豊かな生き方ができるだけでなく、われわれの社会生活に寄与できるような力を培うような教養を内容としなければならないであろう。それは一方では日本国民としての教養を必要とし、他方では世界に通じる普遍的な教養を内容としなければならないであろう。

私自身は、そのことを大学教育の課題であると考えてきたので、私の担当する教科目（教育原理）の授業で、一年生の履修者が多いということもあり、大学において在学中に習得し、身に着けてほしい未来のための教養という内容を提示し説明してきている。

その内容は以下のようなものである。

1. 日本人としての基本的な教養

- 1) 日本語のコミュニケーション能力
読み、書き、聞き、話し、伝える能力
- 2) 日本および日本文化の伝統の知識と技術
基本的な歴史理解、文化理解をした上で説明し、その一部を実践出来ること
- 3) 現代日本社会の理解、社会生活の基本的能力
日常生活の基本技術、情報処理力、自己表現力、理解力、批判力、判断力、洞察力、鑑賞力、創造力
総合的能力—企画、実行、組織運営、葛藤を乗り越える力、困難克服、忍耐、発想、創造、問題解決力

2. 国際的な視野からの普遍的に必要な教養

- 1) 理性・知性—真・善を知る力
- 2) 感性・情操—美・聖を知る力

- 3) 意志・意欲—行為、行動に結び付ける力
- 4) 人間性—人間としての温かな心を持っている
- 5) 社会性—他の人々とよい関係を作れること
- 6) 国際性—異文化・外国人の偏見なき理解
- 7) 国際語としての英語力または他の外国語能力

こうした力は未来の社会を担っていく日本国民、あるいは市民として必要な教養の内容を示しているといえないであろうか。ちなみに、人間性、社会性、国際性は私の大学における共通の目的として、それを大学の教養教育に積極的に取入れる工夫をしているところである。

3 生涯教育と家庭教育の見地から

さて、これまで述べてきたことを前提として、与えられた課題である生涯教育と家庭教育の見地から大学における教養教育の問題について論じてみたい。

生涯教育は、言うまでもなく1960年代にユネスコで取り上げられ、現代社会の変化の激しさや人間の発達についての新しい理解を基に、新しい教育の概念として生れたものであり、我が国でも臨教審において教育の大きな柱の一つとされ、以後は国家主導の形で推進されているものであり、特に近年ではそれが高等教育においても積極的に対応することが期待されているものである。そうしたことから、大学における教養教育の内容にも当然深い関わりをもって来る。というよりも、前節で論じた内容は、豊かな社会生活のためのものである。既に生涯教育（または生涯学習）の視点に立っているものだといえよう。

即ち、大学において培われた教養は、社会生活の基礎となると同時に、社会生活の中においてさらに学び続け得る力、即ち生涯学習を続ける力を内包していなければならないのである。それは大学における教養教育としてのいわば必要条件であるともいえるのではあるまいか。

次に家庭教育についてはどうであろうか。家庭教育とは家庭で両親あるいは両親に代わる役割を果たす家族によって、その社会において最も基礎的な生きる力としての生活のための知識・技術・そして知恵を学習し身につけるものである。

それは言葉の学習にはじまり、衣食と生活に関する行儀作法、対人関係の礼儀などその社会における文化の基礎的な学習は殆ど全て家庭教育でなされるものである。そして、それは年齢に応じて徐々に行われるもので、意図的というよりも無意図的な教育となされるものである。従って、それは大学教育とは元来無縁の

ものであるといつてよい。家庭教育の内容は大学教育に至るまでに殆ど終わっているべきだからである。それにも関わらず、何故家庭教育の視点が大学の教養教育の内容に必要なのであろうか。思うにこれは現在の日本の大学受験勉強という自らが撒いた社会的弊害の結果、家庭でなされるべき教育がなされなかったための「つけ」なのではあるまいか。即ち、大学で家庭教育の補償教育をせざるを得なくなっているということなのである。

生活の一番基本である食事作り、掃除、洗濯など、すべて上膳据え膳で育ってきたとしたら、他のことはおしてしるべしであろう。それは極端だとしても、インターネットで世界が瞬時に情報によって結ばれるような時代になったとしても、われわれの日常の生活の基礎は変わらない。そうした基礎的な生活力、生活のしかた、礼儀作法が大学時代にまで出来ていない学生が多数いるという事実が存在する時に、それは放置するのではなく、

救わざるを得ないのではなかろうか。従って、教養科目としてそうした内容の科目を置かざるを得ないことになる。

そういう意味からすると、この家庭教育からの視点というのはいわば消極的な形でしか受け止められない。しかしそれを積極的に捉えることは可能である。例えば野外生活の仕方、野菜や花作り、大工道具を使用しての工作、救急援助などを教養の科目とすれば、震災時などのボランティアとしての実力もつくのではあるまいか。

最後に、大学の設置基準の改正は大学の教養教育の危機と受け止められているようであるが、むしろそれを一つの重要な契機として、積極的に新たな教養教育の構築の時とすべきだと私は思っているが、如何であろうか。